

私的な素敵なシネマ2016 井上静夫 同人誌主宰

2016年の映画界の話題は、何といっても邦画の『君の名は。』と『シン・ゴジラ』である。『君の名は。』は、もちろん真知子と春樹の出会いの映画ではなく、『シン・ゴジラ』にしても新ゴジラである。ではあるが、偶然にも『君の名は。』（名は…のあとに「。」がないことに注目）と初代『ゴジラ』はともに62年前の1954年に作られている。実に感慨深いものがある。

そしてそんなヒット作とは関係なく筆者はこつこつと好みの地味な映画を見続けている。ということできさつそく2016年お気に入りラインナップをみてみよう。

(洋画)

- ① 『ホームズマナー』（ペドロ・コスタ ポルトガル）
- ② 『ラサへの歩き方』（チャン・ヤン 中）
- ③ 『イレブン・ミニッツ』（イエジー・スコリモスキ ポーランド他）
- ④ 『アスファルト』（サミュエル・ベンシエトリ 仏）
- ⑤ 『とうもろこしの島』（ギオルギ・オバシユビリ ジョージア他）

- ⑥ 『彷徨える河』（シーロ・ゲーラ コロンビア他）
 - ⑦ 『光の墓』（アピチャップン・ウィーラセタクン タイ）
 - ⑧ 『シリア・モナムール』（オサーマ・モハンマド、ウィアーム・シマブ・ベデルカーン シリア・仏）
 - ⑨ 『シーモアさんと、大人のための人生案内』（イーサン・ホーク 米）
 - ⑩ 『若き詩人』（ダミアン・マニヴェル 仏）
- 番外『EIGHT DAYS A WEEK』（ロン・ハワード 英）
(邦画)

- ① 『淵に立つ』（深田晃司）
 - ② 『ふきげんな過去』（前田司郎）
 - ③ 『ひそひそ星』（園子温）
 - ④ 『友だちのパパが好き』（山内ケンジ）
 - ⑤ 『裏切りの街』（三浦大輔）
- 注 カッコ内は監督名と制作国（洋画のみ）

洋画ではこのほか『もしも建物が話せたら』『ジプシーのとき』『ヴィクトリア』『トレジャーオトナタチの贈り物』『誰のせいでもない』『父を探して』『ひつじ村の兄弟』『ある終焉』などがあげられる。邦画もこのほか、『セトウツミ』『永い言い訳』『FAKE』『蜃気楼の舟』『ふたりの桃源郷』

などがあげられる。

2016年のお気に入り作品をざっと眺めてみるとなぜ比較的下半年に集中する結果になった。

洋画のお気に入りラインナップの特徴は、バランスがとれてもよかったことにある。例えば制作国。フランスや中国があり、めずらしくアメリカ映画も入っているし、その他、普段見る機会の少ないジョージアやコロンビア、タイ、シリアなどの作品が見られたことも幸いであった。加えて、フィクションとドキュメンタリー、それにアニメーションにも好みの作品があり、映画としてのバランスが保たれていた。映画はどうしてもフィクション中心になりがちであるが、ぜひドキュメンタリーにも注目してもらいたいと思っている。そのドキュメンタリーの中でも特に『シリア・モナムール』や『もしも建物が話せたら』などは独自の視点から作られていて、まだまだ映画の可能性が広がっていることを予感させるものになっている。ドキュメンタリーとフィクションの垣根が取り払われたかのような『ラサへの歩き方』と『フランコフォニア』にも注目した。どちらもドキュメンタリー風フィクションとも呼べる作品で、観る者にリアルに迫ってくる作品として印象に残った。

リアルといえば邦画のお気に入りほとんどがリアルに描かれたものだ。手法はそれぞれ異なるもののリアルな描写という点で一致しているのである。そして、プロの映画監督といわれる人たちの作品の中で、いわゆる異業種から参入してきた人の撮った作品に目を引くものが少なからずあった。それは、映画の切り口であったり、映像表現であったり、演出方法であったりとさまざまではあるが、いずれも筆者には新鮮なものとして映り、期待を感じさせるものであった。旺盛な制作力の園子温（『ひそひそ星』やハズレのない西川美和（『永い言い訳』）もいいが、意欲的な作品を作る深田晃司（『淵に立つ』）や前田司郎（『ふきげんな過去』）などは次回作が楽しみな作家だ。『ふたりの桃源郷』に代表される老夫婦を追った作品にも最近の特徴がみられる。高齢化時代真っ只中にふさわしく、人生の末期をどう生きるかに洋画も邦画も関心を寄せるのだろう。個々の作品に目を移してみよう。洋画の『ホースマネー』や『光の墓』などは筆者の好みのアート系の作品であり、どちらの作品も独創的な映像美が際立っている。特に『ホースマネー』はどのカットも絵画のように美しく隙のない画面構成でありながらリアリティーも感じさせ、見事とい

うほかない。

映像に関していえば、『彷徨える河』のアマゾン河地帯の圧倒的な映像は有無を言わさないほどの迫力を有し、観客を映画に引きずり込んでいくものであったし、『シリア・モナムール』はシリアの内戦の実態を Youtube にアップされた多数の実写映像を引用して作るという新しい手法の作品になっている。注目すべきことだ。

手法という点では名匠イェジー・スコリモスキも負けてはいない。11人の登場人物で11分間の人生模様を描く『イレブン・ミニッツ』は若さ溢れる斬新な映像表現と野心的な映画作りをしていて驚かされた。スコリモスキ健在なり、である。五体投地というチベット仏教の独特の祈りとともに歩き続ける姿を淡々と追う『ラサへの歩き方』も秀逸だが、『アスファルト』に見られる映画作りの巧さには目を見張るばかりである。小品ではあるが味わい深く映画的な映画といえるものだった。小品というなら『若き詩人』もそう、映像化しにくい詩をモチーフに絵画的に描いた原石のような作品で、この監督の今後を楽しみにしたい。

邦画の『淵に立つ』は、家族の間に他者が侵入してくるさまをスリリングな展開とぞっとする怖さで描写した映画

である。見終わった後は喉に引っかかった小骨のように気にかかる作品となる。『ふきげんな過去』と『セトウツミ』はどうでもいいような会話と掴みどころのない物語を延々と続けていくところが共通していて、妙な感心を抱いた。よくこんな映画を作ろうと思ったもんだ、という作品。ちなみに、『ふきげんな過去』が小泉今日子と二階堂ふみの、『セトウツミ』が池松壮亮と菅田将暉のダブル主演というのも共通している。監督が真に撮りたいものを映画化したであろうことが画面からひたひたと伝わってくる『ひそひそ星』。ディテールに至るまでこだわり抜いた映像がそれを証明している。園子温、今後はどこへ向かっていくのか。年若い女の子と中年男の関係を描く『友達のパパが好き』に対して、若い男の子と中年女の関係を描く『裏切りの街』。対象の共通性とともに、切り口は異なるが日常のリアルをすくい取る表現方法も共通する。

番外の『EIGHT〜』はビートルズフェチの筆者にとって特別な思いのある映画として掲げるものである。

2017年は激動の世界になる予感もあるが、どんな年になろうとも私的に素敵な映画に出会って、またこうしてみなさんにご紹介できるよう望んでやまない。